

学友会東京支部だより

南高

発行 和歌山県立南部高等学校
学友会東京支部
事務局 〒160-0014
東京都新宿区内藤町1-33-103
TEL 03-5919-2180
FAX 03-5919-2181

県立高校大幅再編へ 南部高校は

玉井 伸幸(みなべ町議会議員)

みなべ町芝 在住 1972(昭和47)年卒

昨年8月、あるニュースが和歌山県内に大きな衝撃を与えました。

それは、将来の生徒数減少を見据えた県立高校のありかたとして、現在29校ある県立全日制高校をおよそ3分の2にあたる20校程度に再編するというものです。これは、県教委より諮問を受けた「きのくに教育審議会」の答申として発表されたもので、15年後を視野に段階的に進めていくとされています。

県教委は、この方針の理解を得るため、県内5ヶ所で「懇談会」という名の説明会を開催しました。この場では、当然のように厳しい意見が多く出され、もっとたくさんの人々の声を聞くべきではないかとの意見を汲み、10月～11月にかけて要望のある地域に出向いて説明の場をも持つこととしました。

では、南部高校は一体どうなるのか。OBとしては誰もが抱く疑問であり、不安です。「せっかく県が要望に応じて地域で説明するとしているのだから、この機会に南部高校についてどのように考えているのか聞かせてもらおう。」町議会の発案で町長に働きかけ、関係団体を巻き込んだ「南部高校の未来を創造する会」が発足し、この会が申し込む形で県の説明を聞くことができました。

答申では、南部高校に関連して次のような内容が述べられています。

○普通科

- ・普通科系の学校は、和歌山市で4校程度、和歌山市以外でそれぞれの地域内で1～2校
- ・和歌山市以外の地域では、適正規模（1学年6学級）を維持しつつ多様なニーズに対応できるカリキュラムを整備すべき

○農業科

- ・本県では、農業科が紀北と紀南に各1校存在し、施設設備が充実
- ・農業は本県の基幹産業であり、農業科を存続し魅力を高め活性化を図ることは大変重要
- ・教員の専門性向上、カリキュラムの工夫弾力化、農林大学校や市町村、JA等との連携、全国募集や推薦入試の再導入など大胆な改革を行うべき

答申からは、南部高校、特に農業科としての存在意義を認めていることが読み取れます。

要望に基づくみなべ町での説明会は、11月21日コロナ感染対策上90名弱の参加に抑えつつ行われました。県教委はこの場で、

- ①普通科では、各郡市に普通科高校1校という枠ではニーズに応えきれず、南部高校として一定の役割があること。
- ②食と農園科の内容を充実させながらこのまま存続させたい。
- ③全国募集や推薦入試を食と農園科で導入することを検討する。

紀州五代梅



銀座店〈直営店〉
東京都中央区銀座8-2-10
誠和シルバビル1F
TEL 03-3571-5858

創業天保五年
株式会社東農園
0120-12-5310
<http://www.godaiume.co.jp>

などと言及し、南部高校の今後に期待を抱かせる意向がかなり明確に示されました。

ただ、南部高校が残ればそれでいいというものでは決してありません。特に食と農園科は工夫改善の余地も大きく、その分特色ある方向性を打ち出す可能性も高いと言えます。また、そのためにはやはり地域の協力も必須となるでしょう。希望的に申せば、大胆な改革が成功した暁にはみなべ町の町づくりに影響するものと私は思っています。したがって、この問題に対しては私たち自らが当事者意識を持つべきではないかと考えます。実際、説明会では多くの意見が、それも提案や提言とも言える前向きな内容が出され、非常に意義深いものとなりました。

なお、県教委の当初の予定では、2020年内に再編整備プログラム案を発表し、21年3月中に策定したいとしていましたが、県内各地さらには県議会での「性急にすぎる」との声を受け、これを

延期することとしました。そのうえで、3月末までに改めて高校単位での説明の場を設けていくことになっています。今後の動向が注目されます。



平成29年に開設された「食と農園科」

令和元年に完成した実習棟では、毎週数回、パンやジャム、野菜など生徒の実習作が販売されている。

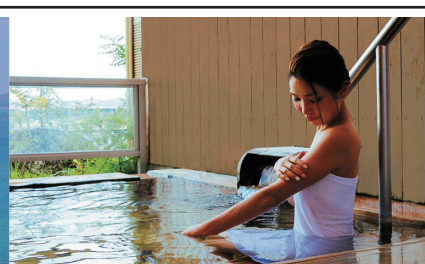
次に紹介するのは、元南部町長 田中 大 一 郎(雅号 蘇州)氏が「随筆みなべ」第16集(昭和43年8月発行)に寄稿された『今は早や忘れられ忘れられんとする明治っ児』の「南高と先代 桂林蔵 君」です。紙面の関係上紹介は一部になりますが、南部高校創成時における先人達の苦労をぜひ知っていただき将来の礎としていただきたいと願っています。

「南高と先代 桂林蔵 君」

田中 大 一 郎

去る5月1日南高より、校舎落成祝賀会への招待を受けました。(略)ふと本校所用の土地買収に当り、故桂林蔵君の功績を知っている人は現在果たして何人いるだろうか、ひょっとすると昔のこととて或いは自分一人より居ないのではなからうか、…。(略)この任に就くに当たり、再三固辞して容易に承諾しなかったのは、余程むづかしい或いは失敗するかも知れんと思ったからであろう。(略)、立ち上がっての桂君の熱意と努力と信望がものを言いその昼夜をわかたぬ奔走に逐次途は拓け、遂に買収が成ったのである。この功績は、南部町としても殊に学校としても、永久に銘記すべきであろう。

ここまで読まれた方は、南部公民館(tel.0739-72-1400)に「随筆みなべ」バックナンバーが揃っていますので、ぜひ全文お読みいただきたいと思います。



海を楽しむ宿 南紀・みなべ温泉
旧入宿舎 紀州路 **みなべ**
〒645-0004 和歌山県日高郡みなべ町埴田1540
TEL. **0739-72-3939** (代表)
<http://www.kishuji-minabe.jp/>

角 飛 息子が将棋のプロになった理由

香車 桂馬 銀将 金将 王将 金将 銀将 桂馬 香車

渡辺 和博（東京都新宿区 在住）
1979（昭和54）年卒



2年前から参加させていただいている地元みなべ町の文芸同人誌『随筆みなべ』に「息子がプロ棋士になりました」というお話を載せました。あまり近くにいない職業のことであり、近頃の将棋ブームのおかげもあって面白がってくれる人もいるとのことで、今回もう少し将棋の棋士についてのお話を書きます。

将棋のプロである棋士は現在170人ほどしかいません。原則として年間に4人しかプロになれないこともあって囲碁やプロ野球の選手などと違ってとても少ない職業です。

息子が将棋を始めたのは幼稚園の時に私が教えたからです。そのきっかけは私が仕事で棋士の羽生善治九段（当時は六冠）と米長邦雄永世棋聖にインタビュー取材をしたことでした。東京の出版社に勤務して当時はパソコン関係の雑誌の編集部にいました。羽生さんは当時、社会現象にもなった七冠のタイトルをすべて取ってしばらくしたところで七冠獲得の対局記録を納めたパソコン用データベースが発売されたというネタで取材したのです。

羽生さんは27～8歳くらいだったのですが、取材していて常人にはないオーラを感じました。それまで経済系メディア、技術系メディアにいたこともあり、例えば孫正義氏のような国内の大企業の社長やノーベル賞を取った学者などさまざまな“大物”に取材した経験がありました。そんな人たちはまた違う「とんでもない才気」を感じさせるオーラでした。

あまりに感動したので、さっそく将棋の盤と駒を買って自宅に帰り、「これからの日本人は将棋だ!」と宣言して、むりやり娘と息子に将棋を教えたのが我が家の将棋のスタートでした。娘は小学校4年生、息子は幼稚園の年長のときでした。最初は「駒崩しゲーム」「歩回りゲーム」「はさみ将棋」「本将棋」と進めていくうちに、娘はさほど興味は示さなかったのですが、息子の方はすっかりハマってしまい、小学校に上がったことをきっかけに千駄ヶ谷にある日本将棋連盟の道場に連れて行って実際に指すようになりました。

その後は毎週日曜日に連盟将棋道場へ送り迎えして通っていました。小学校3年くらいに三段で指していたころ伸び悩みの時期があったようで、本人も環境を変えたいと思ったのか友達から誘われて友達が通っている吉祥寺にある将棋道場へ通うようになりました。



小学校5年の時の子供将棋大会
中央列 右端 息子、中央 現香川女流3段、左端 現谷谷4段

吉祥寺道場に通い始めてからは、小学校が終わるとその足で道場へ行き、営業が終わっても友達と指して毎日終電で帰ってくるという生活でした。客観的にみれば小学生が毎日終電まで遊んでいるわけですから、昔風に言えば不良少年ということになります。親としてはもちろん心配ですが、そう悪い仲間と付き合っているわけでもないし本人も気を付けるというので、ただ見守るだけの日々でした。

親としてちょっと困ったのは、中学に入ったときに入学式の日に担任の先生に「僕、宿題はやりません。将棋の勉強をしていて忙しいんです」と宣言したことでした。都立の学校でそんなことが許されるのか?と思いますが、息子が通った白鷗中学・高校には囲碁・将棋や歌舞伎・舞踊など日本の伝統文化の担い手を育てる特待生の枠があったので、なんとか大目に見てもらえたようです。小学校からの学芸会や中学の文化祭など学校行事はほとんど参加することもないほど日々将棋の修行に打ち込んでいたようです。

あたたく見守ってくれたこうした学校関係の方のおかげで、なんとかプロになれたから良かったようなものの、そうでなければあまり社会に適応できない変わり者ということになります。息子に聞くと、プロになっている人は多かれ少なかれ全員が変わり者だということらしいです。棋士という職業は多くはいませんが、こんな変わり者ばかりだとするとこれくらいがちょうどいいのかもしれない。その面白い日常のエピソードについてはまたの機会に書かせていただきます。



梅をつつむ贅
幸つみ
『黄金漬』をやわらかな道東産の梓前昆布で
つつんだまろやかで旨味豊かな梅干しです。



元祖はちみつ梅
こがねづけ
黄金漬
選りすぐりの紀州南高梅とはちみつが
醸した、まろやかで上品な梅干しです。

梅
はん

通信販売カタログ・商品のお問合せ、お求めは
フリーダイヤル 0120-197-832 FAX フリーダイヤル 0120-319-515
受付時間 平日/午前8時～午後6時 土曜/午前8時～午後5時
〒645-0027 和歌山県白旗郡みなべ町西本庄1224
株式会社梅一番口 <http://www.ume1.com/>



今も心に残る思い出

汐崎 啓治

(みなべ町東岩代 在住)

1971(昭和46)年卒



42年間勤めたみなべ町役場を退職して7年が過ぎようとしている。本当に月日の経つのが早い。だから無駄な時間を過ごさず、悔いなき人生だったと思うよう、退職してからも仕事（梅づくり）に遊びに頑張っている今日この頃である。

私が就職先に役場を選んだのは、高校生の時にアルバイトで行った建設現場での体験があった。生コンを運ぶ仕事でヘトヘトになって休憩していたとき、ネクタイを締めた青年2人がやって来て監督と何やら話をして現場から帰って行った。

「あれは誰や。」と聞いたら「役場職員や。」と教えられた。「あの仕事楽でいいな。」と思ったことが役場を就職先に選んだきっかけになった。

私が役場に就職した年は12年に1度という選挙の当たり年で3月から7月まで6つの選挙があった。新規採用は通常4月から入所するのであるが、何故か卒業式を終えたら3月からすぐに来いと言う。卒業式を終えて遊ぶ間も何もなかった。

配属先は選挙事務を担当する総務課だった。入ってすぐ毎晩残業、土日なし。それが7月まで続いた。残業手当は給料と同じくらいあったと思う。

楽なところと思って入ったのにこの忙しさは何じゃと思っていたら、高校生の時に受けた国家公務員第1次試験合格、面接試験の通知が届いた。差出人は科学技術庁からだった。受けてみたいと思ったが、毎晩残業で上司に相談できる雰囲気ではなかった。

迷っている間に申込期限が過ぎてしまった。どんな仕事をさせてもらえたのか、受けに行かなかったことは今でも心残りである。

総務課で7年過ごした後、産業課を経て福祉課に配属になった。そこでこの「南高卒業生学友会便り」でも取り上げてくれたある出来事があった。

平成20年8月のある日、警察署から電話があり、「南部海岸近くで一人の男性を保護したが、記憶喪失らしい。すぐに来てくれ。」とのこと。

早速、担当職員と警察に駆けつけた。そこには元気なく椅子に座った一人の男性がいた。南の方面から何日かけて歩いてきた。そして何日も食べていないと言う以外は何を聞いても覚えていないと言う。

役場へは旅の途中でお金がなくて立ち寄る人は年間何人もいるが、記憶喪失の人は初めてだった。しかもかなり衰弱しているようだったので、医師の診察を受けに行き入院ということになった。

入院中に警察が手を尽くしてくれたが連絡先は分からなかった。数日して退院となったが、自分の家が分からないのでどうしようもない。課内で協議した結果、記憶が戻るまで民生委員に協力してもらってアパートに住んでもらうことにした。

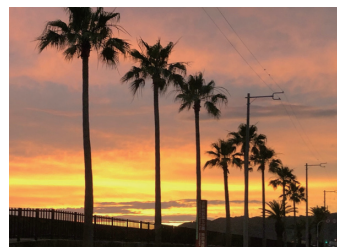
アパートで暮らし始めて数日経ったが記憶が戻る様子もなく、最後に乗り捨てられていた車があった白浜へも何度か連れて行ったが思い出せなかったらしい。

こうなったらメディアに頼るしかないということになり、テレビ局にお願いしたところ毎日放送がニュースで取り上げてくれた。それを見た友人の連絡で身元が分かり、無事に家族に引き渡すことができた。メディアの力は凄いと思った。

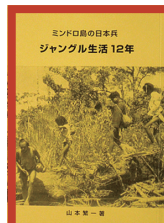
家族が来てくれたときに私は出張で会うことが出来なかったが、母親は「こんなにまでしていただいて、こちらで保護してくれて本当によかった。」と涙を浮かべて感謝してくれたらしい。

彼は自分の名前も覚えてなかったので南部太郎と名前を付けさせてもらった。南部太郎さんは今どうしているのだろうと時折懐かしく思い出すのです。

私の役場生活で思い出に残る出来事でした。



国道42号沿道ヤシの木



ジャングル生活12年 山本繁一著作の紹介文掲載を受けて

大木 尚美
(みなべ町熊岡 在住)
1986(昭和61)年卒

「お父さんのことが紹介されているよ。」南部高校に勤務している主人が、『学友会東京支部だより南高第17号』を帰宅後すぐに見せてくれました。なんとそこには、川口光雄様により、父 山本繁一の著書『ジャングル生活12年』の紹介文が大変丁寧に記されているではありませんか。父が大変な思いをして生き抜いた事を、遠く離れた関東の学友会冊子で取り上げていただいたことに家族として本当に感謝し、今回この原稿を書かせていただいています。

この本は、父が12年のジャングル生活を終え34歳で日本に帰国後、翌年執筆したものです。父は36歳で結婚し、その10年後に私が生まれたので、私が覚えている父の姿にはほとんど戦争の影はありませんでした。ただただよく働き、勤め人ながら早朝から畑仕事に勤しみ、食べ物を大切にし、自分のことは自分でするよういつも言われたことを覚えています。

今思えば、もっとジャングル生活の事を聞いていれば良かったと悔やまれますが、数年前義兄が父の本を孫たちも読めるようにと、1冊しか残ってなかった本をもう一度製本し家族に配ってくれました。

昨年、父が老衰でもう危ないという時期、私は夜な夜なもう一度この本を読み、昼間は父の病室にいました。そんな中、“マラリアで体調が悪く手榴弾で自殺しようとした夜の事”“ジャングルにいたことがフィリピンの日本大使館に連絡され、ヘリコプターから投下してくれた米を、生き残った4名で12年ぶりに食べたときの白米のおいしさ”などを読み、改めて父が体験した想像を絶する日々を思い、「生きて帰って来てくれてありがとう。」と父の顔を何度も何度もさすりました。

父の葬儀の際、この本をゆかりのある方々に貰っていただきました。なぜ川口様がこの本をお持ちなのだろうと不思議でしたが、支部長名に山崎春樹様のお名前があり納得いたしました。春樹さんは私の従兄で、父の葬儀にも遠路ご列席いただきました。このようなご縁で、父の生きた証が少しでも家族以外の方々に知っていただければ、本当に嬉しく良い供養

になったと思います。

父には6人の孫がいますが、それぞれこの本を持っており、時折読んでいます。今年、姉の方に父のひ孫が生まれました。姪は祖父の生還によって命が繋がっていることを語り継げるようにと、「繁一」の繁の字をとり我が子に「政繁」と名付けてくれました。また一つ、父の証が増えたようで嬉しく思っています。

ジャングル生活で食べ物に苦労した父は、とにかく畑に色々なものを植えて家族や近所の方々に振舞うことが好きでした。野菜や果物の世話を体が不自由になる85歳頃までずっと行い、私たちは季節に応じた新鮮なものをいつも頂きました。

2年前から急に私も家庭菜園に目覚め、主人に手伝ってもらいながら現在果実を10種類栽培し、野菜は秋の植え付けを終え、毎日朝出勤の前に草引きや収穫をし、アライグマや害虫とも格闘しています。時折、畑を眺めながら父と同じことをしている自分に一人苦笑するときもあります。

今年はコロナウイルス感染症でいろいろ大変な日々ですが、かえって田舎暮らしのスローライフが見直されています。このみなべ町は梅だけでなくウミガメの産卵地や備長炭など誇れるものが沢山ある大好きな町です。これからもこの町で少しはお役に立てるよう元気に働きたいです。

学友会東京支部様の益々のご発展を今後ともお祈りしています。



孫に囲まれて



愛犬と鹿島

思い出の故郷風景

堅田 十三生

(横浜市青葉区 在住)

1969(昭和44)年 和歌山高専卒



テレビで、「心に残る思い出の風景」、その思い出の場所を訪ねる番組があります。楽しい思い出、悲しい思い出、別れや出会いの思い出、色々な思い出、心に残る風景が紹介されます。見てみると、昔と変わっている風景もありますが、何十年も変わらぬ田舎の田園風景が多く、懐かしさが込み上げてきます。つい最後まで見てしまいます。

私の心に残る風景は、みなべ湾に浮かぶ鹿島とめがね岩と穏やかな青い海、地平線につながる青い空。その風景は夕方になると、海も空も真っ赤に染め、大きな太陽が海に沈みます。雲がある日は雲を黄金色に染め、光の帯を広げて夕日は地平線に姿をかくします。みなべ湾に沈む夕日は色々な姿を見せてくれました。

気持ち沈んだときに思い出すと、穏やかな青い海は優しく包み込んで心を癒してくれます。真っ赤な空、海に沈む大きな夕日からは明日への希望をもらいます。思い出の風景に、いつも、癒され、応援してもらってきた気がします。

最近、小学校の頃のみなべの風景がぼんやりと、とぎれとぎれに思い出することがよくあります。月日の経つのは早いもので、もう60年も前の風景です。

小学校の教室から松林を通して見える青い海の白い波、でも、周りの風景は消えて出てきません。堤防や道路はどうだったのかぼんやりしています。

グランドの周りに大きな松の木があった？その先には相撲の土俵があり・・・ぼんやりと風景が続きます。校庭には松の木が何本もあり、木造の教室で勉強していた思い出の風景も出てきます。

学校から帰ると、山に行ったり、浜に行ったりして暗くなるまで遊んだ思い出、砂浜が広くて三角ベースの野球をした思い出。今と違って砂浜が広がったなあ・・・。

山では皆で桃を採って農家のおいやんに怒られ、段々畑をとんで逃げて、次の日に校長室に集められたこと・・・。逃げきれたと思っていても、おいやんは皆の名前を知っていたのです。椎の実や山桃、桑の実、アケビのおいしかった味・・・。夏に海水浴に行くときは堤防の横の広場にしらすや鰹節が干してあり、鰹の心臓を「へそ」と言って食べながら海に行ったこと・・・と、色々な思い出が断片的に出てきます。

国民宿舎の付近の風景も今とは大きく変わって思い出されます。びわ山と言われ、海に沿って丘が続いていました。夏には磯に遊びに行き、帰りに畑でスイカを取って食べた悪い思い出、冬には丘に登り、メジロを捕りに行った思い出、咲き誇る真っ赤な椿の花がいっぱい咲いていたなあ・・・、つばき坂、お地藏さんがあった？・・・が続いて出てきます。

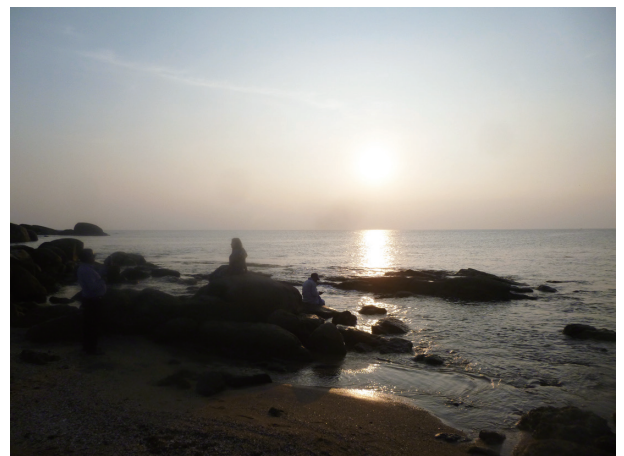
子供の頃、走りまわった道、飛び降りたお寺の石垣、高くて飛び降りるのが怖かった石垣も道も、今はこんなに狭く低いのかと驚きます。

夏の夕方の浜辺は、大きな氷が並べられ、漁船に積み込まれ、何隻もの漁船が一斉に夕日で真っ赤な海に向かってエンジン音を鳴らし、漁に出て行く活気のある風景があり、冬の寒い中では皆で力を合わせて綱を引く地引網、今では見られない昔の風景が出てきます。

みなべを離れて、気がつけばもう半世紀、でも、帰ると迎えてくれる変わらぬ風景があります。



鹿島の夕日



インド洋海岸と夕日

青い海と鹿島の風景、みなべ湾の姿です。

思い出の風景の中にみなべの海、山、自然の中での生活があり、悪いことをすると親以上に近所のおじさんに叱られ、近所の皆で子供達を育ててくれた気がします。貧しくても部落の皆で助け合い、皆が必死で生きてきた戦後の貧しい時代。悪いことをすると誰も見ていなくても多くの誰かに見られているという気持ち、貧しい中、みなべの自然や人々の優しさに守られて育てられ、多くの事を学びました。そこに人生の原点があると強く感じる今日です。

夕日ということでは9年前に、「昭和の日本は満州の夕日から始まった」、戦友の歌「離れて遠く満州の赤い夕日に照らされて・・・」という歌と言葉に感化され、満州の夕日を見に行きました。大きな真っ赤な夕日を想像して行きましたが、トウモロコシ畑から見る満州の夕日はもやがかかり、小さい夕日でした。みなべ湾の太平洋に沈む夕日にはとても及ぶものではありませんでした。

昨年はインドの南端からの夕日を見に行きました。インド洋に沈む夕日も綺麗でしたが、みなべ湾の沈む大きな真っ赤な夕日は一番だと思います。

故郷の変わらぬ自然と我々を育ててくれた故郷に感謝、感謝の今日この頃です。



南部小学校の記念写真 4年生

年とともに

こくお
石大 昭子 旧姓:山辺
(みなべ町西岩代 在住)
1967(昭和42)年卒

若い頃、私は文章を書くのが好きでした。

ところが年と共におっくうになり、もはや手紙など十年以上書いた覚えはなく、もっぱらメールで済ませている始末。さらに最近はラインになり、それも多くの返事はスタンプでごまかしている次第です。

30代・40代の頃は、子供に手がからなくなったら、好きな本を好きな時間に読んだり何か趣味も見つたり、とにかくそういう時間をいっぱい作ろう、作れるだろうと思っていました。

ところが・・・いざそうになると、まず老眼になってメガネが不可欠になり、活字を見るのがおっくうになってしまいました。

好奇心は旺盛でしたから旅行は楽しみましたが、徐々に身体の不具合が出てきて、「どこでも行ける」とは言い難くなってきた上に、今年のコロナで、次はいつになるやら・・・。年齢や身体のことを考えると貴重な一年がムダになりつつあります。

でも、年を取る（年齢を重ねるなどともってまわったような言い方は嫌いです。）ということは“老い”を受け入れさえすれば、良い事の方がずっと多いことに気づきました。心配事も嫌な事も真剣に向き合わずに済ませられます。“万事塞翁が馬”と開き直れる術が身につきました。若返りたいなどとみじんも思いません。年と共に身体に不具合が増え、薬がごく身近なものになるのは当たり前。それと共に“ああなりたい”“こうしたい”という欲望がなくなってきたようです。

私は思います。「後悔はしないけど反省はする、あるいは反省はするけど後悔はしない。」と。そして、若い人達には甘えさせてはもらうけど“依存”はしないように、できるだけ努めていきたいと思います。ただし、頭脳の状況次第ですけど。（笑）

みなべ町での外遊び

尾田 賢治（みなべ町 東本庄 在住）

1999(平成11)年 星林高校 卒

私の生まれは旧南部町で、東吉田に少し住んで、その後 東本庄に引っ越してきました。上南部保育所～上南部小学校～上南部中学校を経て、和歌山市の星林高校国際交流科に進学、米ユタ州の大学（コミュニティーカレッジ）に五年間通い、マルチメディアグラフィックデザイン科と国際学中国語科等、三専攻を卒業して帰郷しました。

当初は日本で仕事をする気はなく、海外で就職しようと就活し内定も数社貰っていましたが、日本と違い新卒でなくても中途採用での受け入れも多々あり、いつでも行けそうな気がしたので、久しぶりに1～2年ほど生まれ故郷で生活して少しお金を貯めてから海外に行こうかなと考えを変更。家業の電器店や農業を手伝いながら、他でバイトをしたりしていました。その間にいろいろな団体や友達も増え、みなべ町でもいいかなあ、みなべ町がいいかなあ と、どんどん考えが変わっていき、いつの間にか親の電器店を継ぎ 結婚、現在二男児の父として毎日忙しく生活をしています。

本題に戻りますが、小さい頃は山、川、海でよく遊んでいたのも、今でも仕事の合間に昆虫採集、鮎やモクズガニ漁、ウミガメ保護の活動等をしながら自然を感じつつ生活しています。趣味の昆虫採集では、自分で捕ったカブトムシやクワガタムシを、ほんまもん（直売所）で販売したりもしています。そして それを買う地元の方もいますが、僕が小さい頃は皆 自転車で山を登り、自分達で捕りに行ったので、店で買うなど昔では考えられないことです。

その理由として、自然の中で遊ぶことが減り、習い事やゲームが増え、ネットで何でも完結できる便利さが影響しているのかなと、自分なりに考えたりもします。お金さえあれば何でもいつでも買える便利な世の中。それは逆に考えると少しの手間を惜しみ、時間をお金で解決することによって、いろいろな事から我慢する機会が減っているともとれます。日本だけでなく世界全体の老若男女問わず起きています。一昔前では考えられないような変な事件や犯罪など、少し我慢ができる人なら結果が変わっていたかも知れません。



千里浜清掃後みなさんと



鮎捕り



昆虫飼育

自然の中での遊びは、自分の思うようにいかないことも多く、ウミガメパトロールや鮎漁（毎年刺し網をしています）を例にすると、見たいときや獲りたいときに結果が出なかったり、これで合っているだろうと答えを出しても実は違っていたり、まだまだ全然勉強が足りないなと思う反面、いつ発見や捕獲ができるか分からない楽しさがあります。

これからの時代は、国際化やネット社会。AI（人工知能）等がどんどん増え、個々人がネットで情報を収集し自由に活動できる機会も増えるかと思います。その分、今あるいろいろな職種が、AIによる機械化や、今は単純労働をしている外国人労働者の専門分野への進出等、簡単に国内で職に就けないことが起こり、日本人が仕事を求めて国外に出ることも起きてくるかも知れません。そして、全国的にも、みなべ町内においても、異常気象による台風の大型化や大雨や洪水、さまざまな自然災害、人口減による過疎化や高齢化等いろいろな問題が出てくると思います。

自然から学び、自然と共に生きる。それは、田舎や都会に関係なく、ハード面や技術面でどれだけ進歩しても、変わらないことだと思います。国内外共通して、これから求められることは、簡単に調べて分かる事をまとめるのではなく、自分で試行錯誤して考える力や、答えがない問題に対しての対処能力、時代の流れや変化に敏感に順応し対応できることだと思います。自然の中には楽しい事ばかりではなく、時には命に係わるような危険も沢山潜んでいます。しかし、危ないから 暑いから 寒いから外で遊ばないのではなく、自分で考え工夫しながらどうやって危険を回避するか。生物としての原点に立ち返り、生きていくことを自然から学ぶ。AIが浸透すればするほど、自分の子供も含め、リアルな自然の中で自分の手で保護や採集・狩猟をしながら、遊びながら非認知能力*を高める。これは学校や塾では学べない、田舎ならではの非常に効率の良い勉強方法ではないのかな、と思います。

*注：自立心、協同性、思考力の芽生え、豊かな感性と表現など生き抜く力



輪郭をなぞる

山崎 澄子 旧姓:井上
(有田市 在住)
1973(昭和48)年卒

現職中、一日に何度も手にとっていた革の手帳がある。定年の少し前から、その片隅に「退職後のやりたいことリスト」のページを作っていた。気儘な時間の増える生活にあこがれながら、密かに項目を増やしていた。「会いたい人に会う」はその中の一つだった。

五十代になった頃からだろうか、知り合いだった方の訃報がポツポツと届くようになった。自分の死だけではなく、他人の死の知らせも「沖の干潟はるかなれども、磯より潮の満つるがごとく」近寄って来るもののようだ。「え? そんな…」もう一回会いたかった。お世話になったお礼を言っておきたかった。昔のようにゆっくりお酒を飲んで、くだらない話で盛り上がりたかった。そんな後悔に小さな歯ざしりすることが増えていた。私の悪い癖「そのうち、そのうち」それはダメだ。そう思うようになっていた。

退職後、早速リストの項目に着手し始めた。時間のいること、コガネのいること、努力のいることもあった。最初に実行したのは、東日本大震災の被災地を時間をかけて車で巡り、自分の目で確認することだった。すでに四年が経っていたが、その爪痕は想像をはるかに越える厳しさだった。また、冬にはオーロラを観るためにフィンランドの北極圏に足を踏み入れた(が、非情にも現れてくれなかった。老いなくうちのリベンジを誓っている。)拙い本も出した。

一方、「会いたい人に会う」プロジェクトは、お金や時間や努力がいることではなかったが、思いの外、妙な勇気がいることだった。会いたい人の中には、三十年以上も連絡をとっていない人もいる。住所や電話番号の分からない人もいる。ただ、その気になれば、そういったことは何とか調べられるものだという事も分かってきた。問題はそこにコンタクトする勇気だ。これがなかなかハードルが高い。そもそもその再会はある意味「不要不急」だ。「なんで今ごろ?」「何の用?」。怪訝に思われるのも無理はない。しかし

運良く再会にこぎ着けたとき、決まってその人は喜んでくれた。「よくぞ連絡してくれた」。「もう一度会えて嬉しい」。だいたいこちらが会いたいと思っている人は、ほぼすべてと言っていいほど向こうも喜んでくれる。実際ここまでのところ、それは事実である。

ただ、不発に終わったことも数回ある。全身を蝕んだ病のために、約束の再会を果たせなかった友人、間に合わなかった恩師もいる。なかでも無念の一つは、繋がる一年前に発症したという脳梗塞のため、失語症を患っていた友人である。細い糸のような繋がりを辿り、ようやく連絡先を突き止めたときには、すでに自由に言葉を操ることができなくなっていた。遅すぎた。やっと繋がったメールも二言三言の挨拶を交わした数回後、突然繋がらなくなった。間をおいて試したが、やはり返信は来ない。もっと前に動かなかったことが心の底から悔やまれた。その後、臆病な私は事情を知るのが恐いばかりに次の行動に出られなくなっていた。自分の年齢から言って、私の焦がれる人たちも、人生の秋から冬を生きている。人は誰もいつまでも生きながらえない。

二年前にそうして会った大学時代の先輩は一頻りむかし話に花を咲かせた後、昔のままの笑顔で「自分さがしやね」「かつて自分を映した鏡に、もう一度自分を映すということやね」と言った。思いがけない言葉だったが、そう言われてみると、昔の人に会いたいという気持ちの裏側には、その頃の自分を確かめたいという思いがあるのかもしれない。ぼやけてしまったかつての自分の輪郭をなぞろうとしているのかもしれない。

ただ、本当は好きだったのに馬鹿な意地を張って別れてしまった人だけは、遂行へのハードルがやたら高い。無理に飛び越えようとしたら、コケて骨を数本折りそうだ。そんな頃の輪郭だけは、見ぬ振りをしておくのが身のためかも知れない。



ちどり梅



卸部門



0120-10-3682

〒143-0024 東京都大田区中央6-30-1
株式会社ウメタ東京営業所
<http://www.umeta.co.jp>

お店



0120-10-3504

ばいおうえん
株式会社梅翁園東京直売店
営業時間: AM10:00~PM5:00 お休み: 土・日曜日 祝日



幼い頃のみなべの町は楽しかった

竹中 司郎

(川崎市麻生区 在住)

1958(昭和33)年卒

わたしも80歳を過ぎて生きています。

そして今よく思うことは、長く生きた自分の人生のなかで何が一番大事なことであったのかをよく考えてみると、それは「みなべ」の思い出です。わたしが生まれたのは、みなべ町立石でした。それから小学校の1年までそこで暮らし、2年生からは高校の教師であった父の老家である上南部村晩稲(オシネ)に転居して育ちました。

その南部町と上南部村がわたしの人生の基盤となっていることが、いつも思い出されるのです。幼稚園のころは、近所の年下の浜田君や年上の森上君などと町中を遊び回り楽しかった。何が楽しかったかといえ、その一つは鹿島さんの見える海でした。家から駆け出して浜で砂や石を拾ったり、波とびしょぬれになって遊んだりした。そして遠くを眺めると鹿島さんがそんなわたしたちを静かに見守ってくれていた。カシマさん、カシマさん、カミサン、カミサンとわたしは叫んでいた。遊んだのはそこだけではない。1kmほど浜辺を歩いて「めがね岩」にも、「ニゴの浜」にも行って泳いだり、貝を拾って遊んだり、春にはツバキ坂ではタケノコを取ったりもした。

転居した上南部村では、晩稲(オシネ)の川や池で泳いだり、フナやナマズやウナギなどを捕まえて家に持ち帰ってジジやババを驚かせたりした。夜はホテルが田んぼの周りにむらがり飛び回っていた。そんな夜の村に夏の子ども相撲が各地の寺や神社にあった。時には近所の大人の人に連れてもらって上芳養村まで自転車で夜の坂道を登って子ども相撲に行ったこともある。電灯一つを竹の竿にぶら下げた灯りの会場での夜の相撲。多くの住民の賑わいの中で相撲を取りながら夜空を見上げると、星でいっぱい。わたしはそんな宇宙の星の下で相撲を取っていた。田舎の素敵な自然とそれを身体いっぱいに感じて生きた少年時代でした。

小学校2年生で転校したときには、「転校ヤロウおれたちの学校に来るな。」とさげすまれイジメに遭った。帰りの掃除の時間にホウキでぶったたかれたりもした。仲間に入れてもらえないと転校できない。どうしようかと悩んだが、その相手をやっつけることで、私の人生を生きることができた。

そんなこともあったが、その後クラブ活動で野球やテニス、書道など夕方暗くなるまで友達と楽しく活動して生きることができた。

他にもわたしの少年時代のみなべの地域には田舎の楽しいことがいっぱいあった。晩稲のお寺、光明寺で

の浄土宗のナムアミダブツを唱えるお勤めや墓参りなど。お盆祭りでは、「月が出た、出た、月が出た・・・」などの踊りや太鼓。他にも、勇壮な社殿と山の環境にめぐまれた須賀神社での秋の祭りがあった。獅子舞やお神楽、馬掛、各地域からの10メートルほどの竹竿の旗を持った行列など。山内や北道の南部町の人たちなど1000人ほどの人が集まっての壮大な神社祭りであった。ケンカをする人もいたり、日頃の生活とはまったく違った熱と神秘を感じさせてくれた。南部町の北道でもお神輿があったのを覚えている。これもエネルギーいっぱいの行事であった。

こうした少年時代のみなべの体験が、わたしの人生を生きるなかでの重要な基本となっていた。そのことを80歳を過ぎて生きるわたしが、今 実感していることである。

大学を受験するときも、会社に就職するときも、就職して仕事に励むときも、みなべの体験が基盤となっていた。何をすることが生きていて楽しいのか、生きがいを感じられるのか、それはすべて「みなべ」にあったのだ。

就職したNHKでの仕事で地球科学、生命科学、宇宙科学、宗教学などの分野に打ち込んだのも、少年時代のあの素晴らしいみなべの体験を生かしたい、ということからであった。

中でもわたしが40歳代の頃に作った、NHK特集10本、「日本列島動く大地の物語」は視聴率27パーセントも取り、若者に大人気で、当時の大学受験に革命が起きたこともあった。それがもとになってNHKスペシャル番組「地球大紀行」12本シリーズも放送することができ、あの頃の放送をもう一回ビデオで見たい、という学者もいて最近電話があった。

みなべの町よ、ありがとう。



植田からの鹿島



白梅

F8



黒牡丹 P20



早春

F6



牡丹園の猫

変形P10

中村 妃佐子さんのプロフィール

中村 妃佐子（千葉県茂原市 在住）

1976年 和歌山県立南部高等学校 卒業

1981年 金沢市立美術工芸大学
美術学科 日本画専攻 卒業

1983年 愛知県立芸術大学大学院
美術研究科 日本画専攻修了

個展・グループ展 多数
現在無所属



富貴花

変形P10

第10回南高学友会東京支部総会・懇親会の延期

今年7月に予定していました総会・懇親会を「新型コロナウイルス」の感染拡大により今年の秋（10月31日予定）に延期することにしました。

懇親会を楽しみにしておられる会員の方々には申し訳ないですが、皆様のご健康と感染予防を最優先として、延期を決めました。

今後コロナウイルスの状況を見ながら、後日 開催案内をお送りいたします。

皆様どうぞ健康管理には十分ご注意ください。

★支部だよりの原稿を集めています。お気軽にご応募を！

学友会では会員の親睦に役立つ内容に心掛け、支部だより作りをしています。

○テーマは問いません。文字数 400字詰め原稿用紙で1～4枚位（ワード編集・手書き可）

○ミニギャラリー オリジナル作品なら何でもOK! 今まで掲載されなかったジャンルもOK!

・油彩・水彩・写真・パステル・クレヨン・鉛筆画・水墨画・版画・絵手紙・俳画・

・ガラス絵・布絵・切り絵・パッチワーク・書（毛筆・硬筆・ペン字）・俳句・長歌・短歌・川柳

・立体作品（彫刻・模型・風・他）等々の作品をお待ちしています。

原稿はデータ・プリントどちらでも可。 送付先は事務局楠本宛て。



事務局から

● 賛助会員新規入会 ●

今回、次の5名の方が入会してくださいました。（敬称略）
嬉しいですね！

渡辺 和博 中村 妃佐子 保坂 みどり
松川 和義 竹内 宏

● ご寄付ありがとうございました ●

下記の方々からご寄付をいただきました。（敬称略）
心よりお礼申し上げます。会のために有効に運用させていただきます。

松原 永久 竹中 司郎 坂本 龍

編集後記

皆様のご協力のもと、今回も支部だより第18号を発行することができました。

会員の方々には投稿のお願いに気持ちよく応じていただきありがとうございました。

昨年初めから新型コロナウイルスが世界中に拡散し、予想を超えて感染者が増えています。

日本でも全国に拡大し、首都圏、関西に非常事態宣言が出され、不要不急の外出の自粛、飲食店の営業時間短縮などで日常生活も従来とは違ったものとなり、今日に至っています。

このため学友会恒例行事の散策も中止せざるを得ませんでした。

このような状況で編集会議も担当者が集まることができず、不慣れなパソコンでのインターネット会議を数回行いようやく発行にこぎつけました。

支部の最大の課題は会員の若返りです。支部だよりの発行継続、支部維持のためにも皆様のお知り合いに支部のことを話していただければと思います。

（事務局 楠本）

編集スタッフ

楠本 邦一（TEL・FAX 047-341-9282） 齋藤 文子 神田 典子 森下 武子 三本 陽子